

## 連綿連続にみる日本語の抑揚階調表現

— 『源氏物語繪卷』を中心に『榮花物語』『大鏡』 —

萩原 義雄

はじめに

平安時代の最盛期とは、天皇の中央支配政権から藤原氏が摂関政治を構築して、これが完璧に整い、他の氏族の者がこの政権を覆すことが許せないほどに整った時期を云うのであろう。その時期は、摂関白の地位を確保した藤原道長を最高峰として生まれていきます。道長の時代、文化素養の人々たちはそれぞれ豊かな感性の世界を開き始めていく。茲に紹介する『榮花物語』は、道長の娘彰子の宮1-1-1 延宮仕えの女房として活躍した赤染右衛門の作であると云います。同じく、一条天皇の中宮彰子に使えた女房には、『源氏物語』の作者紫式部もいます。敢えて、この宮廷女流文学者の作品を取り上げてみる所以は、この物語が歴史物語という新たな物語を育み始める最初でもあったからです。この歴史物語には、男性側の立場で翁と青侍との問答形式を以て綴った『大鏡』という作品が並列的に存在します。また、物語文学のなかで尤も長編作品といえる紫式部『源氏物語』を繪卷にした『源氏物語繪卷』四軸(徳川本及び五島本)を基にこの両作品における仮名書き連綿連続の書きぶりを比較しながら眺めていきます。

### 歴史物語

歴史物語としてみたとき、是までの六国史『三代實錄』が光孝天皇で終わり、已後の官撰の史書が存在しないことから、この『榮花物語』が宇多天皇から筆を起こして、六国史を継承する書となっている。

古写本としては、三条西家本(鎌倉時代十三世紀の書寫二種)が現存しています。

また、『源氏物語』は、成立年代一〇一一年頃として、菅原孝標女が『更級日記』で彼の五十四帖を手に入れ全て読むことを記述していますから、この時代既に原本の轉寫がなされていたことが判明します。しかし、現存する古写本類(青表紙本・河内本)はすべて鎌倉時代のものばかりです。そして、繪卷こそが物語が成って百餘年後の十二世紀前半の院政時代に完成されたものですので、詞書きの連綿連続のかな書き文としては、こちらの方が古い資料と云うことになります。現存する四軸すべて国宝、一級資料なのです。この『源氏物語繪卷』の繪詞について、国語学的に索引を作成し、その語彙を研究した田島毓堂(元名古屋大学教授)さんが知られております。

この資料を今般、かな連綿連続性の文字の立場から卷一軸について、逐一検討していくことにしましょう。

### 《語頭・語中・語尾 「ひ」 文字の連綿連続について》



※卷一軸252⑩「ひたるに」の四文字は同じ勢いで、字母「比多留仁」をかな書き連綿連続した書記文字のところへ。



※巻一軸 254④「(御しのひ)ありきに」と前行から連続する字  
母「之乃比」の「比」にあたる語ですが、行替えに伴  
い先頭に位置した文字です。ですから、次の「ありきに」と連  
綿連続していません。



※第一軸 254④「さふらひ」の連続連続で、線の太さも一定しています。  
ここでは字母「佐不良比」で「ひ」の文字は、最終文字として表記さ  
れています。語頭の「ひ」文字とは起筆から降りあがる曲線度が異な  
っていることにお気づきでしょうか。



曲線使いを見せています。

※巻一軸 255①「いたうねひすきに」と連  
綿連続する語の中間に「ひ」文字が見え、  
線上も柔らかみが表出していて実に豊かな



※第一軸 255③「ひとゝきゝしりに」の「比」  
漢字の草書文字における起筆から旋転し下か  
ら上の線の太さ、そして上にあがる瞬時のと  
ころでの抜き線、最後に再び右斜めに緩やかに外方向に軽い曲をもつて降っていく。そして、次の「と」  
文字の起筆がすつと何処もともなくはじまり、踊り字「ゝ」の連綿が始まり、「き」の線を第二の基  
点とする太さで次の連綿連続が始まります。



※巻一軸 255⑤「ひさしかりつる」の「ひ」の文字は線  
上豊かに運ばれ、次の「さ」文字との連続性はないが、  
「ひ」と「さ」の文字がより接近することで連綿性を保  
持しています。「さし」と「かりつる」の空いた間隙は、

見えない連綿連続というものでしょう。この流れは、筆と紙質とが影響し合った證しなのでしよう。  
字母は、「比左之可利徒留」となります。全体が左側から右側へと斜行して表現されていることにも  
気づくところです。



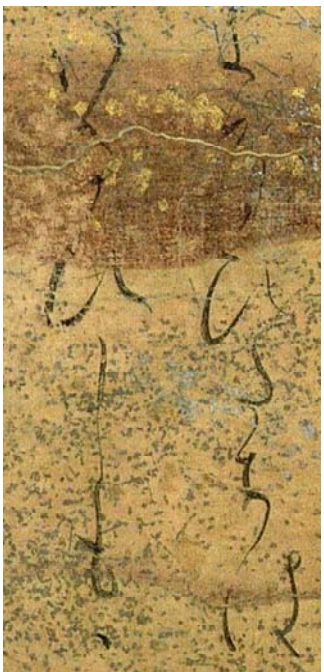
の連綿がよく表現されたところでは。

※巻一軸 255⑩「とひとりこちて」と  
格助詞「と」のあとに、語頭「ひ」文字から連綿  
連続表記しています。そして、「りこちて」の線  
は次第に墨付きが薄くなっています。「ひ」と「と」



に似た和らいだ表記法となっています。

※巻一軸 256④「うちはらひ」まで連綿連続し、  
「つゝ」と続けます。「うちはらひ」の語尾とし  
て「ひ」のなが用いられ、現代の「ひ」文字



※巻一軸 257 ② 「ひたちは」と 257 ③ 「ひしも」とがほぼ並ぶようにして表記されています。この並列された「ひ」を見るに、前者は連続連続しているのに対し、後者は「ひ」は次の「しも」とは連続連続していません。この二つの「ひ」も前者が細み「V」式であり、後者が丸み「U」式の凹みとなっていることに気づかされます。



※巻一軸 258 ⑤ 「(ま)うて たまひ けり」と「ひ」の文字は、「たまひ」と連続連続して語尾に位置し、次の助動詞「けり」と繋がっています。文字「ひ」は「多万比」でこの「ひ」と右斜め上にあがる曲線は内側に向かってそれより再び右斜めに太く曲線がっています。



※巻一軸 258 ⑨ 「くる またひすか(た)」の「ひ」文字は、「たひすか(た)」と連続連続しています。文字は「久留 万」「堂比寿可(太)」となります。「U」式の広がりある文字となっています。

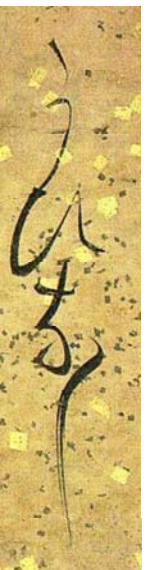


※巻一軸 258 ⑪ 「ぬひ のくる」と「ひ」文字は「ぬひ」と連続連続しています。「ひ」文字は、細長く右斜めに傾斜した形態を見せています。文字は「奴比」「毛乃」となります。



※巻一軸 259 ⑤ 「おもひすてたまはしなと」と連続連続した語中三つめに表記されています。その

の「ひ」と次の「す」はやゝ連続線が見えないのですが、「す」の起筆部分が「ひ」の最終画から出しています。文字は「於毛比寿天多末波之奈止」となります。



※巻一軸 259 ⑧ 「かひなし」と「ひ」文字は語中に用いられています。文字は「可比奈之」となり、四文字を二文字ごとで連続連続させています。最後の「し」文字は筆のかすが中盤あたりから見えていて、書き手の筆遣いが良く表出しているところです。

「絵合」



部に接近したところに位置しています。字母は「比良可世」となります。

※巻一軸 261② 「みつし」ともひらか(せ)と「ひ」文字は「ども」の「も」に連綿連続し、下の「らか」の「ら」と分断していますが、上の「ひ」の下



乃堂比者多天」となります。

※巻一軸 261⑧ 「このたひはたて(まつらし)」と「ひ」文字は、上部の「のた」と連綿連続し、下部「はたて」の連綿連続のところに位置しています。字母は「己

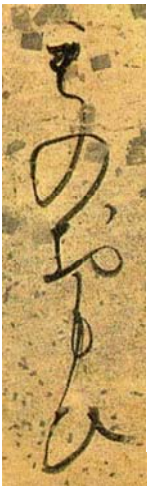


て表記されていることです。また、「御日記」は『土左日記』の冒頭部の「日記」と同じように漢字表記されています。

※巻一軸 261⑩ 「たひの御日記」の「ひ」文字は、「たひ」の二文字が連綿連続し、下接部「の御日記」の四文字が連綿連続しています。ここでは「ひ」文字と「の」文字が離れ



※巻一軸 261⑬ 「させたまひける」の「ひ」文字は、「まひ」と連綿連続し、下接部助動詞「ける」で連綿連続しています。字母は「万比希留」となります。この「ひ」は、「V」型鋭角に表記しています。



調和を成し得ています。

※巻一軸 262③ 「ものおもひ」の「ひ」文字は、五文字連綿連続した語尾に用いられています。字母は、「毛乃於毛比」となります。上接の「の」や「お」の表記には流線が用いられ、よく全体

《此の「柏木」の箇所から書寫者が別人となっております》

### 「柏木」



※巻一軸 263⑧ 「(う)ちしひやつれたまひてうるハシ」の

「ひ」文字は、「ちしひのひ」「たまひてうるハシ」と同行に二種類見えていて、それぞれ異なる字母表記文字を用いています。字母は、「(字)遅之飛也徒連多万比天字類八之」で、「飛」と「比」の表記になります。この下の方の「ひ」文字は、「たまひてうる」と六文字が連綿連続しています。ことに「ひて」の連綿連続が確認できる箇所となっています。



※巻一軸 263⑫ 「わつらひ たまふさま」の「ひ」文字は、「わつらひ」と四文字連綿連続した語尾に用いられています。字母は「和川良比」となります。細書きの流麗さが際だつ文字となっています。



※巻一軸 264⑫ 「とかく ひとく つくろひき」の「ひ」文字は、「ひとく」「つく

ろひき」と連綿連続し、同行に二種類見えています。いずれも字母「飛」を用いています。字母は「飛止く 徒久呂飛幾」となります。

「飛止く 徒久呂飛幾」となります。

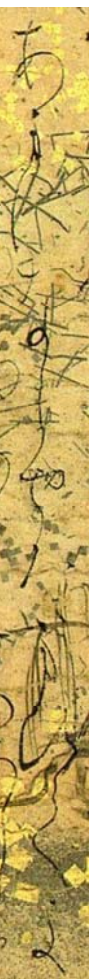


※巻一軸 264⑫ 「おこのひにも」と、「このひにも」の五文字が連綿連続しています。字母は「於己乃飛仁毛」となります。



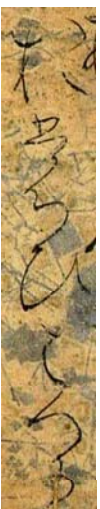
※巻一軸 264⑮ 「おほむめをしのこひ たまふ」の「ひ」文字

は、「おほむめをしのこひ たまふ」と「こひ」と連綿連続しています。字母は「遠之乃己比多満不」となります。



※巻一軸 264⑰ 「あまに ならせたまひてよ」の「ひ」文字

は、「ならせたまひて」と連綿連続しており、字母は「安万仁 奈良世太万比天 与」となります。



※巻一軸 267⑭ 「おもひ はへる」の「ひ」文字は、「おもひ」と連綿連続し、字母は「於裳比 者部留」となります。「ひ」文

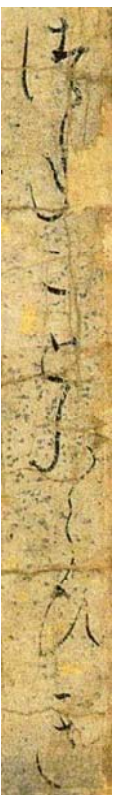
字は、典型的な「V」型の字様となります。



※巻一軸 267⑮ 「ひころも か(くなむ)」の「ひ」文字は、前行「比」文字との釣り合いから、「飛」文字で語頭に用い、「ひころも」と連綿連

続し、字母は「飛己呂毛」となります。

「柏木・二」



※巻一軸 268① 「つね ニ とふらひき」の「ひ」文字は、「とふらひ」と連綿連続し

ていて語尾に位置し、字母は「止不良比」となります。

※巻一軸 268② 「おほむ よろ こひ 二

の「ひ」文字は、前行「比」文字との釣り合いから「よろ こひ」と連綿連続して、字母

「与呂己飛」となります。



※巻一軸 269③ 「むつひ ならひ づる」の「ひ」文字は、「むつひ」及び「ならひ」と連綿連続し、字母は、「武川比」「奈良比」と

なります。同行のなかで二度用いられていますが、ここでは、同じ「比」を使用しています。三文字、三文字の整いがなせる表記法と言えましょう。

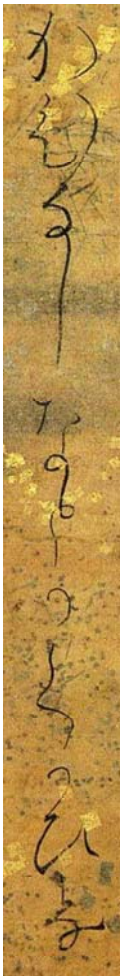


※巻一軸 269④ 「こひしかるへき な(けき)」の「ひ」文字は、「こひしかるへき」と連綿連続し、字母は「己飛之可留部支 奈(計支)」となります。

そして、前行の「比」文字との釣り合いから「飛」の表記を用いています。



※巻一軸 269⑥ 「よろこひ と て」の「ひ」文字は、「よろこひ」と連綿連続して語尾に位置し、字母は、「与呂己 止天」となります。



※巻一軸 269⑧ 「かひなし なとかく かひ な(く)の「ひ」文字は、「かひなし」と「なと

かくかひ」とそれぞれ連綿連続し、語中、語尾に位置し、字母は、「加飛奈之」「奈止可久可比 奈(久)」となります。同行において別々の字母「飛」と「比」とを用いています。そして、字母「飛」の文字は、前後の文字とともに、連綿連続しややすい表記であることが見て取れます。



※巻一軸 269⑩ 「(よ)ろこひ 二」の「ひ」文字は、「(よ)ろこひ」と連綿連続し、字母は、「(与)呂己飛」となります。



※巻一軸 269⑪ 「おもひ はへりつれ」の「ひ」文字は、「おもひ」と連綿連続し、字母は「於裳比 者部利川連」となります。



※巻一軸 269⑫ 「(かた)ひらひき」の「ひ」文字は、「(かた)ひらひき」と連綿連続し、字母は、「(かた)ひらひき」と連綿連続

し、字母は、「(可多)飛良比支 安計 多万部連 八」となります。前行の「比」に続く同行最初の「ひ」文字表記を「飛」とし、次に「比」文字を用いることで釣り合いを調整しています。



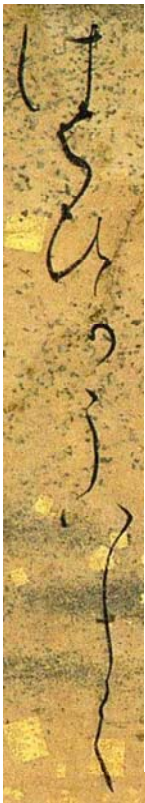
※巻一軸 269⑮ は、「はかりひき いて」の「ひ」文字は、「はかりひ」と連綿連続し、字母は、「盤可利比

支 以連天」となります。



※巻一軸 270⑥ 「ふすまひき か け」の「ひ」文字は、「ふすまひき」と連綿連続し、字母は、「不須万飛支 加 遣」となります。

字母「飛」文字は、前の「万」の文字、後の「支」の文字のなかで連続しやすいことを示しています。そのため、「衾引き」までを連続させています。



※巻一軸 270⑧ 「けはひか う ハしく」の「ひ」文字は、「けはひか」と連綿連続し、字母は、「計者比可 宇人之久」となります。



※巻一軸 270⑩ 「わつらひ た(る)」の「ひ」文字は、「わつらひ」と連綿連続し、字母は「和川良比 堂(流)」となります。

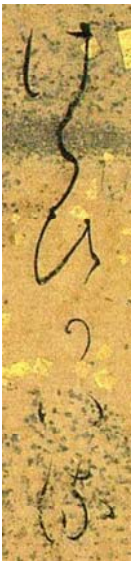


※巻一軸 270⑪ 「ひころか さなる まゝ には」の「ひ」文字は、「ひころか」と連綿連続し、

続し、字母は、語頭に位置して「飛己呂可 佐奈留 万仁 者」となります。



※巻一軸 270⑫ 「かみひけも」の「ひ」文字は、「かみひけも」と連綿連続し、字母は、「加美飛計毛」となります。



※巻一軸 270⑬ 「けはひか ハる」の「ひ」文字は、「けはひか」と連綿連続し、字母は、「計者比可 八流」となります。



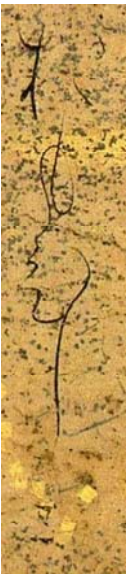
※巻一軸 270⑭ 「やせ さらほ ひ たまへるし」の「ひ」文字は、「さらほひ」と連綿連続し、

字母は、「也勢 佐良本比 多万部留之」となります。



※巻一軸 271④ 「ひさしく わつらひ たまひつるる ほと

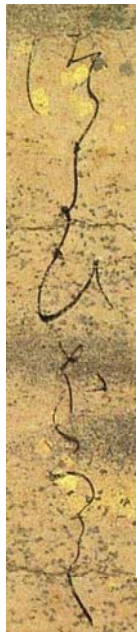
よ」の「ひ」文字は、語頭「ひさしく」と語尾「わつらひ」語中「たまひつる」の三語で、字母は、「飛佐之久」「和川良比」「多万飛川留」となります。



※巻一軸 271⑨ 「おもひし 二」の「ひ」文字は、「おもひし」と連綿連続し、字母は、「於毛飛之 二」となります。



※巻一軸 272 ④ 「おもひ じゃへら(さりしを)」の「ひ」文字は、「おもひ」と連綿連続し、字母は、「於毛比 者部良(佐利之越)」となります。



※巻一軸 272 ⑤ 「つきひ をへて」の「ひ」文字は、「つきひ」と連綿連続し、字母は、「徒支比 遠 部天」となります。



※巻一軸 272 ⑧ 「ひきとゝ め らるゝ」の「ひ」文字は、語頭「ひきとゝ」と連綿連続し、字母は、「飛支止ゝ 女 羅留ゝ」となります。

ります。



※巻一軸 273 ⑥ 「おもひ」の「ひ」文字は、語尾「おもひ」と連綿連続し、字母は、「於毛比」となります。



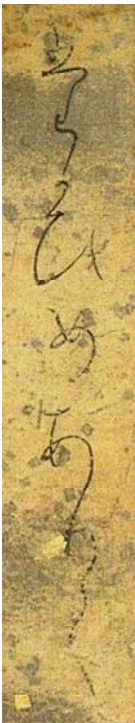
※巻一軸 273 ⑨ 「おもひ はへれとも」の「ひ」文字は、「おもひ」と連綿連続し、字母は、「於毛比 者部礼止毛」となります。

す。



※巻一軸 273 ⑩ 「なをしのひ かたき」の「ひ」文字は、「なをしのひ」と語尾に位置して連綿連続し、字母は、「奈遠之乃飛 可

多幾」となります。



※巻一軸 274 ② 「たかひ め ありて」の「ひ」文字は、「たかひ」と連綿連続し、字母は、「堂可比 女 安利天」となります。

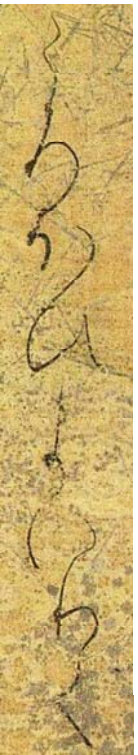


※巻一軸 274 ⑤ 「ほそく おもひ なり」の「ひ」文字は、「おもひ」と連綿連続し、字母は、「本曾久 於毛比 奈利」となり

ます。



※巻一軸 274 ⑥ 「おもひ はへりし を」の「ひ」文字は、「おもひ」と連綿連続し、字母は、「於裳比 者部利之 遠」となります。



※巻一軸 274 ⑦ 「ころほひ まいりて」の「ひ」文字は、「ころほひ」と連綿連続し、字母は、「己呂本比 末以利天」となります。





※巻一軸 275⑥ 「おもひ はへる」の「ひ」文字は、「おもひ」と連綿連続し、字母は「於裳比 者部留」となります。



※巻一軸 275⑭ 「おもひ あ ハ する」との「ひ」文字は、「おもひ」と連綿連続し、字母は「於毛比 安八 須留 己止」と

なります。

「柏木三」



※巻一軸 277③ 「みる ひと／＼」の「ひ」文字は、「ひと／＼」と連綿連続し、字母は「美類 飛止／＼」となります。



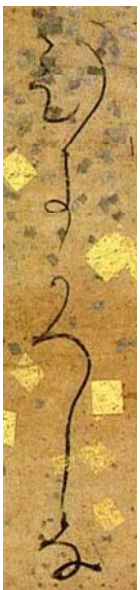
※巻一軸 277⑨ 「わらひ たまふ」の「ひ」文字は、「わらひ」と連綿連続し、字母は、「和良比 多万婦」となります。



※巻一軸 278② 「おもひ あかり」の「ひ」文字は、「おもひ」と連綿連続し、字母は、「於毛比 安可利」となります。



※巻一軸 278③ 「うしなひ つる」の「ひ」文字は、「うしなひ」と連綿連続し、字母は、「宇志奈比 川留」となります。



※巻一軸 278⑩ 「ひきかへしな(けかれ)」の「ひ」文字は、「ひきかへしな」と連綿連続し、字母は、「飛支可部之奈(計可礼)」となります。

「上戸」



※巻一軸 283② 「おひえて ないたまふて」の「ひ」文字は、「おひえて」と連綿連続し、字母は、「於飛衣天 奈」となります。



※巻一軸 283⑥ 「あけた まひて」の「ひ」文字は、「まひて」と連綿連続し、字母は、「安計太 万飛天」となります。

おわりに

已上、かな「ひ」文字を中心にその前後の表記を考察してみました。文字表記には調和をもって二

つのかな「比」と「飛」とが交互に用いられていることを実際に確認してきました。こうして、様々な字母を再度見ていくことで、当時の表記方法の実態が明らかとなっていくことでしょう。